

氷の魔道騎士

宙の君へ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界最強の冰雪系伐刀者、深雪凍夜。

しかしその少年の正体は、他人には全く興味が無い系イケメン男子!?

最強だけど並み居る強敵を薙ぎ倒して駆け上がる学園ソードアクション開幕!!

目

次

氷と炎

男と女

プロフィール

零度の頂点

選抜前夜

16 11 9 1

# 氷と炎 男と女

## 《伐刀者》ブレイザー

己の魂を武装——《固有靈装》として顕現させ、魔力を用いて異能の力を操る千人に一人の特異存在。古い時代には『魔法使い』や『魔女』とも呼ばれてきた彼らは、科学では到底測れない力を持つており、最高クラスならば時間の流れを意のままに操り、最低クラスでも身体能力を超人の息に底上げすることが出来る。

人でありながら、人を超えた奇跡の力。

武道や兵器などでは太刀打ちすることすら叶わない超常の力。今や警察も軍隊も——戦争ですら、伐刀者の力なくては成り立たない。だが大きな力には相応の責任が伴う。その一つが《魔道騎士制度》である。魔道騎士制度とは、国際機関の認可を受けた伐刀者専門の学校を卒業した者にのみ『免許』と『魔道騎士』という社会的立場を与え、能力の使用を認めるというものだ。

そしてここ、日本の東京都に東京ドーム十個分という広大な敷地を持つ『破軍学園』もその免許を取得するための、日本に七校ある『騎士学校』の一つである。ここでは若い伐刀者たちが『学生騎士』として日々己の技を磨き、切磋琢磨している。

「なるほど。下着姿を見てしまった事故を、自分も脱ぐ事で相殺しうとしたと……」

皮のソファーアに座る、煙草をくわえたスース姿の麗人、破軍学園理事長・新宮寺黒乃はとある騒ぎの原因と経緯を目の前にいる少年から聞き終えると、これでもかという程の呆れた表情で言い放つ。

「アホだろお前」

「ファフティファフティで紳士的なアイデアだと思つたんですけどね」

「まあ、確かに意味紳士的はあるな」

「いや変態紳士という意味ではなく……」

「今更何を言つても遅いと思うがな。お前からも何か言つてやれ、同じ男としてどうなんだコイツは」

黒乃是後ろで壁に寄りかかっている少年に話を振った。淡い青の髪色の少年は閉じていた目をそつと開き、冷めた無表情のまま言った。

「…………別に。自分には関係ないので言うことは特に」

「はあ…………」

黒乃是こめかみを抑える。全くと言つていいほど他人に無関心なこの少年には頭を悩まされる。

「…………はあ。ステラさんには留学初日に申し訳ないことしてしまつたなあ。このことで日本を嫌いにならないでくれればいいんだけど」「なんだ。黒鉄はヴァーミリオンのことを知つているのか」

「ついさつき思い出しました。鉢合わせした時はきが動転していてわすれていましたけど」

彼女の名前はステラ・ヴァーミリオン。ヨーロッパの小国ヴァーミリオン皇国の第二皇女である。彼女が日本の破軍学園に入学したことはそこそこ大きなニュースになっていた。『十年に一人の天才騎士！ヴァーミリオン皇国第二皇女ステラ・ヴァーミリオン様（15）破軍学園に歴代最高成績で首席入学！』という見出しの新聞記事は、まだ記憶に新しい。

「本物のお姫様で首席なんて、凄いですよねえ」

「そもそもぶつちぎりのナンバーワンだぞ。全ての能力が平均値を大幅に上回り、伐刀者にとって一番大切な能力である《総魔力量》に至つては新入生平均の約三十倍。正真正銘のAランクだ。化け物

「…………それを言うならあんたもでしよう。理事長」

「私よりも遙かにあつちが化け物だ。同じAランクとはとてもではな  
いが思えんな。…………能力低すぎて留年してもう一回一年生やる  
Fランクとはえらい違いだな。なあ、そう思うだろう？《落第騎士》  
「ほつといてください」

むすつとした表情で黒乃の嫌味に抗議しつつ、しかし否定しない。出来るはずがない。何しろ黒鉄一輝の《総魔力量》は平均の十分の一しかないのだから。

「しかし困つたことになつた。留学には色々な手続きがあるから入学

式より早く来日してもらったのだが、初日からこんなハプニングが起ころとはな。まあともかく、この一件、下手をすれば国際問題にもなりかねん」

「たかが下着姿を見られただけで国際問題か。めんどくさい……」「あのな深雪<sup>ふぶき</sup>、ヴァーミリオンは國賓だぞ？しかも小国とはいえ一国の皇女だ。ヴァーミリオン皇国の現国王は娘を溺愛していてな、少しの不祥事でもあれば武力衝突も免れん。黒鉄には非はないが——」

「俺が相手しますよ、ヴァーミリオンの」「なに…………？」

黒乃の眉が僅かに上がる。

「いくら黒鉄に非がないとはいっても、責任を取るのは尤もだ。しかし、Aランクの奴にFランの黒鉄が勝てるとは思えない。もし負けでもすればいい恥晒しだ。黒鉄にもプライドというものがあるだろうし」

「そんな、僕は…………！」

「まあ尤も、話し合いで済む相手ならいいが——」

その時だ。

「…………失礼します」

理事長室のドアが開き、件の少女、ステラ・ヴァーミリオンが入室してきた。

シックな色合いの趣味のいいブレザー。破軍学園の制服姿だ。主張しない色合いが、炎のような髪を際立たせてとても良く似合つている。特に目が引くのは胸元だ。制服の上からでもわかる大きな膨らみがリボンを押し上げ、強い存在感を放っている。その存在感に一輝は思わず、息を飲み込む。

泣いていたのだろうか。恨みがましい視線を投げてくる目元は赤く腫れている。

「ごめん」

だから、その言葉は自然と口から出た。男は女の子を泣かせるものじやない。たとえ自分に非がなくとも、彼女があの瞬間感じたである恐怖は本物なのだから。

「あれは不幸な事故で、僕も別にステラさんの着替えを覗こうと思つたわけじゃない。ただ、見てしまつたものは見てしまつたわけだから、男としてケジメはつける。ステラさんの気が済むまで煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「…………潔いのね。これがサムライの心意気なのかしら」

「口下手なだけだつて」

氣着心地のよい済んだステラの声に、一輝は苦笑にする。するとステラも・・・・・強ばつた表情を和らげて、薄く微笑んだ。

「ふふ・・・・・正直などころ、ええ、もう来日していきなり痴漢に遭うなんて、なんて最低な国のかしらと心底この国が嫌いになりかけたし、国際問題にでもしてやろうかとかも思つたけど、貴方のおかげで少し気が変わつたわ。貴方がそれほどの心意気を見せたからには、アタシも皇族として寛大な精神で応じなければならぬわね」  
(なんだ、ちゃんと話せば分かつてくれるじゃないか)

「イツキ。貴方の潔さに免じてこの一件、――――ハラキリで許してあげるわ」

前言撤回。

「ちよつと待つて。なに? 大負けに負けてハラキリなの!」

「それはまあ、姫であるアタシにあんな粗相をしてかしたわけだし死刑は当然でしょ? 本来なら丸太に縛り付けて国民全員で一発ずつ石打ちするところを、本当に特別なんだからね」

「それもう死刑というよりただユツケ作つてるだけだよね」

「名誉死にしてあげるだけでも出血大サービスよ」

「出血するの僕なんですけど! てかハラキリつていつの時代の話かわかつてないよね! 今平成ですよー!」

「ははは。黒鉄。なかなか上手いことをいうな

「いや笑つてないで理事長も教育者なら、この校内殺人止めようよつ!?

!

「黒鉄。お前の命一つで日本とヴァーミリオン皇国の恒久的な平和が買えるんだ。安い買い物だとは思わないか?」

「人の命は安くなんかないよつ!」

一輝からしてみればこれほどのぼつたくりはない。

「あ、あのさあステラさん。もう少し他の解決策はないのかな?」「む、何が不服なのよ。日本男子にとつてハラキリは名誉なんでしょう?」

「だから今は平成だつてのつ!」

「なによ!さつきからへーセーへーセーつて!それにさつき煮るなり焼くなり好きにしろつて言つたじやない!男なら自分で言つた言葉には責任持ちなさいよツ!」

「い、いや、あれは日本語独特の言い回しというか、ホントに煮て焼かれる予定だつたなんて思わなかつたし!」

「言い訳も言い逃れもしまくりだな黒鉄。男としてケジメとは何だつたのか」

「うるさいですツ!」

そんな事より目先の命だ。

「……と、ともかくたかが下着姿見たくらいで命までは支払えないよ!」

「たつ、たかがですつて!?し、しししし信じられない!信じられないわこの変態ツ!!」

「へ、変態ツ?」

「婿入り前の姫の肌を汚しておいてなんて言い草なのツ?!お父様にも見せたことないのに!!」

一輝の不用意な言葉にステラの瞳に怒りの炎が灯る。いや、燃えているのは……瞳だけではない。

ステラの周りの空気がひりつくような熱を帶びて、燐光を散らし始めていた。

(そういえば新聞に書いてあつた彼女の能力は———)

「もう許せない!アンタみたいな変態・痴漢・無礼者のスリーアウト平民はこのアタシが直々に消し炭にしてやるわ!!傅きなさい!  
『妃竜の罪劍』!」

瞬間、理事長室を熱を帶びた極光が照らし、ステラの両手に炎を纏う大剣が顕現した。それは伐刀者の魂を具現化させた固有靈装。

## 『聖剣』『魔弓』『呪具』『宝具』——

様々な形態をとつて伝説や伝承で語られる『魔法の杖』だ。伐刀者はこの媒体を用いることで、己の異能——伐刀<sup>ノウブルアーツ</sup>絶技行使する。そして、『紅蓮の皇女』の能力は、全てを焼き尽くす灼熱の炎——「覚悟しないこの変態……！」この世から塵一つ残さず蒸発させてやるわ……ツ！」

「ほ、本気かツ!?

「問答無用ツ!!」

「はあ……深雪」

振り下ろされる炎剣。それは一輝に直撃する——はずだつた。

「なツ……!?」

炎剣は振り下ろされることなく目の前に突如として現れた氷の盾で防がれていた。

「この学園では私情での靈装展開は禁止されている」

「これ、アンタがやつたの……!?」

「ああ」

「だつたらアンタも同罪ね！この学園にいるくせに校則すら知らな——ツ!?

ステラは驚愕した。何故ならその少年は固有靈装を展開していかつた。ただ右手を前に出していただけだつたのだ。

「何でツ!? ただの能力だけでアタシの伐刀<sup>ノウブルアーツ</sup>絶技を防げる分けないわツ!?

「実際に防いだだろう。悪いようにはしない、今すぐ固有靈装をしまえ」

「えつらそうに……こんな氷、燃やし溶かしてやるツ!!」

「……………そうか、なら少し頭を冷やさせる必要があるか」刹那、彼を起点にさつきまで灼熱地獄のように暑かつた室内温度が急激に氷点下近くまで下がり始める。

髪からは霜のような燐光が散り始め、身体中から冷氣を発し始めた。

「な、なに、これ……」

「深雪くん、君は…………」

(まずい…………!)

ステラは辺りを見渡した。部屋の壁、床、窓ガラス、様々な物にピ

キピキと氷の膜が張つていく。

刹那の――――――

「そこまでだ！ 深雪！」

「…………」

黒乃の凜とした声が響いた同時に室内の温度が急激に平温へと戻る。一輝は何が起こったか分からぬでいたが、確かに事はただ一つ分かつた。目の前にいるこの少年は、間違なく強い。ただそれだけだつた。

「つたく…………お前は私たちを殺すつもりか？」

「…………いえ。自分は帰ります、もうヴァーミリオンも落ち着いた

ようなので」

「あ、おい…………！ 深雪…………！」

黒乃の静止も聞かず、少年は理事長室を後にした。残された一輝とステラは先程までの現象に脳の整理が追いついていないようだ。それもそうだ。いきなり部屋中が氷漬けに近い状態になつたのだから。「り、理事長！ な、なんなんですか!? アイツ！」

我に返つたステラはソファに深く座る黒乃に食い入るように詰め寄つた。

「――――伐刀者だ」

「そんなの見てわかります！」

「名前は深雪凍夜。<sup>ふぶきとうや</sup>能力はヴァーミリオンと真逆の、全てを凍て尽くす極寒の冰――――――

黒乃は煙草をくわえ、一息ついてから口を開いた。

「暫定ランクはA」

「A!? アタシと同じつて事!?!」

「世界中にいる冰雪系能力者の中でも深雪を越す者はいない。故に奴はこう言われている。『世界最強の冰雪系伐刀者』とな」

「世界最強の…………」

「冰雪系伐刀者・・・・・」

「二つ名が無いからそう言われているだけだが、実力は間違いなく世界トップレベルの域にある。固有靈装を一度も使用したことがないことも由来しているのかもしけん」

「理事長は戦つたことがあるんですか・・・・? 彼と・・・・・」

「―――――ああ」

黒乃はゆっくり瞳を閉じて、思い出すように言つた。

「完敗だつた。試合時間はたつたの十秒。私の人生の中で唯一手も足も出さずに負けた」

「たつたの十秒つて――――」

「初めてだつた。あそこまで手も足も出なかつたのは。全盛期の私ならもう少し戦えていたかも知れんがな」

自嘲氣味に喋る黒乃是煙草の煙を吐き出した。まるで苦い思い出を吐き出すかのように――――

続くかも・・・・・?

# プロフィール

キヤラクター紹介

文責・日下部加々美

深雪 凍夜

TOUYA FUBUKI

所属：破軍学園二年一組

伐刀者ランク：暫定A

伐刀絶技：???

二つ名：???

人物概要：世界最強の冰雪系伐刀者

攻撃力：???????

防御力：???????

魔力量：暫定A

魔力制御：???????

身体能力：???????

運：????

かがみんチエツク！

こちらが今作の主人公、深雪凍夜くん！見ての通り、魔力量以外なーんにもわかんないのが現状！だつて彼、公式戦はおろか自分の固有霊装とか伐刀絶技も使わずに相手をコテンパン、もしくは半殺しに出来るほどの強力な能力を持つてるからしょーがないつちやしょーがないよね！二つ名がないのも珍しいよね！でもでも、あの理事長を倒したつてほどだから相当つてか絶対強いのは間違いないと思うな！実はここだけの話、彼の伐刀絶技は禁技指定されているらしいよ！一体どんな伐刀絶技なんだろうねえ。もしかして分子とか原子とか、あまつきえ時間さえも凍結させてしまう最早チート級の伐刀絶技だつたりして！いやー、妄想が止まりませんなー！

変態淑女ことステラさんも、少し彼が気になる様子！実は時折見せる笑顔が子供っぽくて可愛いみたい！ここまで規格外に強いとホントは人間じやなくて魔人じやないの？って思っちゃうけどホントの

ところはどうなんだろう？謎が多い人物の一人だね！

こんな彼だけど、実は弱点があるの。能力の特性上暑いところは苦手みたい。夏とかはホントにダメ見たいで魔力の消費を抑えるために常に全身に冷えピタ貼つてるって噂！それを聞くと、なんか可愛く見えるね！好きな食べ物はアイス！これまた可愛くて、特にイチゴ味のアイスが大好物！餌付けしたら懷いてくれるかなー、なんてつ。だから炎を使うステラさんとは相性が合わないの。あ、性格とかじやないからね？能力の相性がつてこと！

特徴としては能力発動時、身体中から冷気を出すところ！体壊さないといいね。性格は他人に全く無関心！目の前に美女がいてもへのカツパ！色仕掛けなんて無意味！イケメンなのになんか残念だよねー。でも私は諦めない！絶対振り向かせてみせるよ！

やつぱり既成事実をつくるしか……（ボソツ）

おつと、ほとんど関係ない話になつたけど今日のところはここまで！続きはいつかまた書くよ！

まだまだ二つ名とクソ長い伐刀絶技募集中だよ！返信は忙しくて出来ないけど、作者はちゃんと見てるみたい！みんな才能あり過ぎてスゴい！厨二病こじらせてない？そろそろ現実見た方がいいんじゃない？

それじゃ、またねー！

## 零度の頂点

「あの『世界時計<sup>ワールドクロック</sup>』が、たかが学生騎士に負けたっていうの!?」

「あれでたかがと言えるお前の度胸が羨ましい」

「彼は一体どんな騎士なんですか?」

「さつきも言つたがただの冰雪系伐刀者だ」

「そのただの冰雪系伐刀者にアタシが負けるって言いたいんですか！」

ステラは食らいつくように黒乃に迫った。

「お前達も本能的に感じただろう、アイツの規格外今までの“暴力”を。近づくだけで相手を凍らせる極寒の氷。もはやただそこに『在る』だけで他者を圧倒する脅威。大した能力だ。あそこまで攻撃的な能力を有し、なおかつ使いこなしている者はそうはない」

二人は固唾を飲み、黒乃の話を聞いていた。ただそこに『在る』だけで他者を圧倒する脅威――――

「だが、お前たちが『七星剣王』を目指すのであれば何れ越えて行かねばならない壁だ。何処までも高く見果てぬ壁だがな――――」

「それってつまり・・・・・・」

「今年の七星剣武祭には深雪も出す」

――――――――――――――――――――――――――――――――

理事長室を出た凍夜を待っていたのは、彼も苦手としているあの男だった。

「やあ、深雪くん」

「・・・・・桐原」

桐原静矢。対人戦最強と謳われる能力と『狩人』の二つ名を持つ、狡猾かつ尊大な態度が目立つ凍夜の同級生だ。

「君も七星剣武祭に出るんだ?」

「盗み聞きとは趣味が悪いな」

「たまたまだよ、たまたま。でも驚いたなあ、君が『七星剣王』に興味があるなんてね」

「《七星剣王》？……ああ、優勝した際に与えられる称号か。そ  
んなものに興味ない」

「あつはは！そう言うと思ったよ！そうだ、君はそういう人間だつた  
ね」

桐原は額を抑えながら高笑いした。

（本当に騒がしい……）

「そろそろ校内選抜予選も始まる。もし当たつたらお互い、いい試合  
をしようじゃないか」

「試合になればいいけど」

「え？それってどういう……」

「話はそれだけか？俺は帰る」

踵を返し、長い廊下を歩いていく。その姿を薄ら笑いを浮かべながら  
見ていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

魔導騎士が国家の戦力としての側面を持つ以上、当然戦闘技能が求  
められる。国家間の戦争はもちろん、伐刀者としての力を悪用する  
《解放軍》をはじめとするテロ組織やら犯罪結社に対抗するためにも  
これらは必須だ。

『あの子がヴァーミリオンの《紅蓮の皇女》かー』

『すっげえ美人じやん』

『髪の毛が綺麗……燃えているみたいで素敵……』

『まあ、それでもうちの深雪には勝てねえよ』

『そうだよな！やつちまえ深雪！皇女サマに怖気付くんじやねえぞ  
！』

第三訓練場の中心に深雪凍夜とステラ・ヴァーミリオンの姿があつ  
た。レフエリーを挟み、二十メートルほどの間を空けて対峙する両  
者。

「アンタ。ホントに噂ほどの強さがあるのかしら」

「周りの野次にいちいち耳を貸す必要はない」

「わかつてるの？アンタ、負けたらあのイッキとか言う奴が退学にな

「なんのよ？」

「なら勝てばいいだけの話」

「…………あくまでアタシに勝つつもりなのね」

「…………」

さも勝つたも当然、とでも言っているかのような余裕な態度が更にステラを苛立たせた。

（その鼻つ柱、へし折つてやるわ！）

「それではこれより模擬戦を始める。双方、固有<sup>デバイス</sup>靈装<sup>ライアント</sup>を《幻想形態》で展開しろ」

「傳きなさい。《妃龍<sup>レーヴ</sup>の罪劍<sup>テイン</sup>》！」

ステラは魂の具現である剣を《幻想形態》―――人間に対しても物理的なダメージを与せず、体力を直接削り取る形態で召喚し、目の前の男に突き立てた。

「――――起きて、《冰闇<sup>アルマス</sup>の絶劍<sup>マヌス</sup>》

虚空から現れたのは氷の刃と揶揄されても過言ではない程美しい直剣。刃の先端に行くにつれて赤みを帯びるそれは、まるで返り血のようにも見える。

「よし。…………では、試合開始！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

「ハアアアアアアア！」

開幕と同時にステラは一気に距離を詰め、炎纏う一刀を振り下ろす。力任せに叩きつける一撃は、一見粗暴に見えながらも恐ろしく鋭い。しかし大振りは大振り。避けるまでもない。凍夜はそれを片手で受け止めた。

「ツ！」

（アタシの一撃を受け止めた!?しかも片手で!?)

凄まじい轟音が鳴り響き、凍夜の後方は衝撃波で訓練場の地面に亀裂が走る。

（しかもアタシの渾身の一撃の衝撃を体を通して地面に逃がした……?）

ステラは凍夜から距離をとり、構え直す。

(なんのよ)イツ……本気の「ほ」の字すら出してないじゃない……!)

間違いなく遊ばれてるのは自分だ。

「こんの……ツ！」

轟、と風を鳴らし先ほどより数倍の速度で距離を詰めた。上段からの斬りおろし、それもまた片手で受け止められる。

(ヴァーミリオンの)剣撃は一撃で大地に激震を奔らせる問答無用で相手を押し潰す一撃だ。本来なら彼女の一撃を受け止めること自体不可能……)

『おおお…………つ!!』

上がる歓声。彼らが見つめるのは、《妃竜の罪剣》。その焰が描く軌跡だ。それは研ぎ澄まされた剣技の軌跡。

〔『インペリアルアーツ皇室剣技』か。西洋の棒振りにも術理はあつたか〕

(動きが全部読まれてる……!?)

(何故深雪は魔力を使わない。しかも、人前では滅多に見せない靈装まで使つて……つ!まさか、深雪、まさかもうあの伐刀絶技ノウブルアーツを使つているのか!?)

ステラの剣戟をいなしながら凍夜の口角が釣り上がる。

「そろそろ時間だ」

「はあ!何がよ!」

「最初のあの一撃。中々効いた、こちらもお返しをしなくてはな」

〔《スワンレイク白鳥の湖》・再演〕。受け取れ、お前の力を」

「え……?」

スツーーー、と《妃竜の罪剣》の上に《氷闇の絶剣》の刃を軽く乗せた瞬間、ステラの総身が軋みを上げながら地面にクレーターを形成した。

「ああああああああああああああああ!!」

(《スワンレイク白鳥の湖》。発動したら一定時間魔力の行使が出来ない。一見デメリットしかない伐刀絶技だが、恐ろしいのは《白鳥の湖》発動中に受けたダメージを数十から数百倍の威力で相手に返す《スワンレイク白鳥の湖》。

**再演**。ただでさえヴァーミリオンの最初の一撃は並の相手では両腕を粉碎される威力がある。だがそれを数十倍から数百倍の威力で倍返しされたら、ヴァーミリオンの両腕はもはや木つ端微塵で済まされない。……（こはもう……ツ！）

『時間凍結』！

パンつ、と乾いた発砲音が響き、ステラは時間が止まつたかのように悶えた姿で一向に動かない。その両腕は最早原型を留めていたなかつた。

「誰でもいい！早くストレッチャーを！」

『見ろよ、ヴァーミリオンの両腕がひしやげてるぞ…………』

『何が起こつたんだよ…………』

『やつぱり深雪はつええよ』

「…………」

冷めた目でステラを見やると『氷闇の絶剣』を虚空へと化し、踵を返した。

「深雪」

「…………」

「いや、なんでもない」

そのまま訓練場を後にする。

（凍結能力を使わなかつただけ幸い、か…………）

彼の名は深雪　凍夜。

世界最強の冰雪系伐刀者。

後に、『零度の頂点』と呼ばれる者である。

## 選抜前夜

「…………ん、つ」

じんわりと、白い光が視界に滲み、ステラの覚醒を促した。 目を開けると、映るのは低い天井と、

「目が覚めたか。ヴァーミリオン」

ステラが横たわるベッドの横に座り、煙草をふかしているスーツ姿の黒乃だ。

「理事長先生…………ここは？」

「君の部屋だ。数時間前に iPS<sub>カプセル</sub>再生槽での治療が終わってな。ここに運んだ」

ふう、と黒乃の紅をさした唇から煙草の煙が吐き出される。

(こ)、禁煙のはじじゃ…………

「…………てことは、私は負けたのね」

「ああ。両腕粉碎だけでよかつたな」

ステラは自分の両腕を見ると、先の模擬戦で原型を留めていなかつた両腕はすっかり元に戻っていた。

「…………はあ。久しく忘れていたわ。負けるつて…………

こういう気分なのね」

「まあ、あまり気に病むことはない。相手が相手だからな。現時点でお前が勝てる男ではない」

「元世界ランギング三位に勝つたつて、ホントだつたのね」

化け物にも程がある。

いや、初めて会った時から薄々は気づいていた。あの男は、修羅や鬼とは違う——正真正銘の化け物だと。

「理事長先生」

「なんだ?」

「フブキ…………センパイは、何者なんですか?あれ程の力を持つていながらなぜ学生騎士なんて枠に…………」

「お前の疑問は最もだ。…………アイツは既に、人間の外側にいる」

「外側……？」

それ以上黒乃は口を開くことはなく、一服した後ステラの部屋を出て行つた。

????  
✉???. ?? \*???

まだまだ肌寒い四月の早朝。

巨大な敷地を有する破軍学園の前に、二つの影があつた。

「…………ステラ・ヴァーミリオン」

「なんですか？センパイ」

「何故付きまとう」

「何となく」

「…………」

先程からこの会話の繰り返し。

寮から学園までの道をステラは凍夜の後ろを付いて離れないのだ。

「…………腕は大丈夫か」

「え？あ、うん。お陰様で」

「そう」

（あれ？この人、案外優しいのかしら…………）

「おやおや、誰かと思えば深雪くんじゃないか」

前方に視線を投げれば、声の主が大仰に手を広げながら近づいて來た。

「…………何の用だ、桐原」

「おいおい、そんな怖い顔で睨まないでくれ。同級生に挨拶しただけじゃないか」

桐原と呼ぶ少年は、凍夜の後ろにいる少女に目線を向けた。

「おや？君は、確か深雪くんに負けた留学生の皇女殿下じやりませんか」

「―――だつたら何よ」

「これは失礼、あまりにも美しいのでつい…………」  
（うげえ…………）

ステラの顔が引き攣るのと同時に、桐原はそのまま学園の方に帰つて行つた。

どうやら、本当に挨拶しに来ただけらしい。

「…………何なのよアイツ、氣色悪い」

ボソッ、と呟いたステラを置いて凍夜は学園内に足を入れる。その後を続くようになにステラも追つた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「はーい☆新入生のみなさんっ！入学おめでと――――――――ツ！  
♡」

新入生のクラスの教壇で『パーン』とクラッカーを鳴らし、教壇に立つ若い女性教師は満面の笑顔を浮かべる。たつた一人を除いて。「わたしが一年一組のみなさんの担任をさせていただく、折木有里です。担任を持つのは初めての新米教師だから、みんなも気兼ねなく友達感覚で『ユリちゃん☆』って呼んでくれたら先生超うれしーな♪そして、こちらは皆の一つ上の先輩！二年三組の深雪凍夜くんだよ――――――――つ！」

折木から自己紹介されると真顔で『パーン』と手に持つていたクラッカーを鳴らした。

(え、今鳴らすの？それ)

タイミングが絶妙におかしい。

・・・・・・・・これから始まる七星剣武祭出場枠を賭けた戦いの日々の幕開けにしては、えらく軽いノリだつた。

「・・・・・なんか疲れる先生ね」

縁があるのか、隣の席になつたステラが、折木の独走気味のテンションにぼやく。

「深雪くん、捕まつちゃつたんだね。折木先生に・・・・・・・・・・・・

「イツキは知り合いなの？」

「前によつとね――――」

「えー、今日は初日なので授業はありません！でもでも、先生から一つだけみんなに『七星剣武祭代表選抜戦』について連絡があります。深

雪くん、フリップあるかな?」

「はい」

予め用意していたのか教壇の教卓から大きめのボードを取り出した。

その内容とは———

「んと。まずはこの学園は去年までは『能力値』で選手をある程度選抜していました」

ボードを指さし棒で指しながら折木は続ける。

「でも今年から『能力値』は廃止!・『全校生徒参加の実戦選抜』に制度が変わりましたっ!」

折木が『イエーイ!』とパチパチパチ拍手すると、一拍遅れて深雪もパチパチと拍手する。真顔で。

ノリがわからない。

「全校生徒が選抜戦を戦つて成績上位者『六名』を選手として選抜するの!わーおバイオレンスッ!そしてその試合の日程は生徒手帳に『選抜戦実行委員会』からメールで送られてきます!便利だよね!ナウでヤングだよツ!」

深雪が取り出した生徒手帳を指差しながら解説する。

破軍学園の学生証は、身分証明から財布、携帯電話、インターネット端末と何にでも使える優れものである。

「だから、ちゃんと確認して指定の日時に指定の場所に来てね。来ないといと不戦敗つてことになっちゃうか注意すべし♡」

「先生」

ふと、ステラが手を上げる。

「ノンノン。ユリちゃん☆つて呼んでくれないと返事してあげないゾ?」

「・・・・・ゆ、ユリちゃん」

「はい、なーにステラちゃん」

「選抜戦つて何試合くらいするんですか?」

「詳しくは言えないけど、一人十試合以上は軽くかかるかなー。選抜戦が始まつたら、三日に一回は必ず試合があると思つてくれていよいよ

♪

教室のあちらこちらから不満の声が上がる。

まあ、無理もない。誰も彼もが七星剣武祭に興味がある訳では無い。なんたつて自分もその一人なのだから。

七星剣武祭は『幻想形態』ではなく『実像形態』を用いた真剣勝負。負傷はもちろん、場合によつて命の危険すら伴う戦いになる。

そんな危険を犯しても自分を高めたいなどというストイックな人間が果たして、この世の中にどれ程いるだろうか。

誰もが思つてゐるだろう。平穏に卒業して、魔導騎士としての資格を得て、高給で安定した仕事に就き、幸せな家庭を築く。

そんな平坦な道を望んでゐる生徒もいるはずだ。

「これ、棄権したり、負けたら罰則とかあるんですか？」

そんな生徒の一人が、折木に尋ねる。

「ううん。罰則なんてないよ♪当然成績のマイナスもありません。勝てばちよつとボーナスは付くけどね☆もちろん不参加も可。だから『七星剣武祭に興味なんてねーやー』って人はそのメールを送つてきた『実行委員会』に不参加の意志を書いて返信してください。自動的に抽選から弾かれるようになります」

『でもね・・・・・』と一拍置いて、折木は続ける。

「確かに大変だと思う。だけど、誰にでも平等にチャンスがあるといふ一事だけでもこの制度は素晴らしいものだと、先生は思うな。ここにいる誰もに、七星剣武祭の優勝者『七星剣王』になるチャンスがあるつて事なんだから。だからできればみんな参加して、目指して欲しい。その経験はきっとかけがえのないものになると思うから」

そこまで話終えると、また満面の笑みを浮かべた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

日はすっかり落ち、黒の帳を一筋の月明かりが照らすのを寮の自室から眺めていると突如として端末に着信が入る。

「はい」

『深雪。お前に仕事が入った』

声の主は理事長の黒乃。『仕事』と言うワードが出てくるという事は、『解放軍』が現れたのだろう。

「生徒会長と副会長に要請は」

『いい。この時間だ、既に夢の中だろう。代わりに寧音をそつちに寄越す。無理矢理にでもいい。あの墮落した臨時講師をこき使つてやれ』

「分かりました。場所は」

『すぐ近くのショッピングモールだ。人数は数十人程度。お前と寧音なら三分も掛からんだろう？なるべく捕縛を最優先、無理なら最悪殺しても構わん。後の詳しい話は現場の警察に聞いてくれ。頼んだぞ』

「了解」

そこで通話を切り、軽く上着を羽織り冷凍庫からアイスキャンディーを数本取り出し、その内の一本を咥える。

ルームメイトを起こさないように部屋のドアを開けるとそこには、着物を着崩した黒髪の小柄の少女が立っていた。

「よつ、ふ一坊」

「お久しぶりです、西京先生。これ」

「おー！これこれ！ふ一坊は気が利くねえ」

西京と呼ばれた少女は差し出されたアイスキャンディーを嬉々としながら袋を切り、口に咥えた。

彼女の名前は西京 寧音。『夜叉姫』と畏れられ、KOK・A級リーグ現世界ランク三位。日本が世界に誇る、超がつくほどの一流騎士である。

「くーちゃんなんて？」

「出来れば捕縛、無理なら殺せだそうです」

「ふーん。あ、そいやふ一坊と一緒に『仕事』すんのいつぶりさね」「さあ…………忘れてしました」

「そんな事より、ふ一坊…………あんた、本当に人間辞めちまつたんだねえ？」「…………それはあなたもでしょう」

寧音を見下ろす凍夜の瞳が、怪しく光り出す。

それを見上げる寧音の口角は次第に上がり出す。

「いい目するようになつたねえ……怪物同士、よしなにやろうぜ？」

「はい」

そんな話をしていると、目的のショッピングモールに着いた。既に何台かのパトカーも待機している。

大まかな説明を聞き、二人はショッピングモールの中へと入つていく。

そして宣言通り、三分も掛からずモール内にいた《解放軍》を制圧してみせた。

「骨のねえヤツらだねえ、相変わらずさ～」

「理事長、制圧完了です」

『ご苦労』

報告も終わり、寧音の元へと向かう。

「そんじや、事後処理は任せたぜ～」

「分かりました！」

凍夜はまたアイスキャンディーを取り出し口に咥える。  
「物足りない…………つて顔してんぜ、ふー坊」

「……………そうですか？」

にやにやしながらこちらを見る宁音を横目で捉える。

「どちらかと言うと、自分より西京先生の方がそう見えます…………

そのやる気満々な目で見ないでくれますか」

「本気のふー坊と戦つてみたくてさ～…………」

寧音の瞳が爛々と輝く。鬪争を剥き出しにした獣の顔に凍夜は目を細める。

「西京先生の能力でここ一帯、更地になりかねないので嫌です。理事長に知られたら殺されますよ」

西京　寧音は重力を操る自然干渉系能力者である。黒乃とは昔からのライバルと聞いたことがある。噂によるとかの《鬪神》の弟子らしい。凍夜にとつては大して興味のないことのため曖昧としか覚えていない。

この人のチートはこれだけではない。重力を操作できる時点で勝ち組のような気がするが、気が触れたのか。拳句の果てには宇宙からスペースデブリを引き寄せ、第二宇宙速度で地表に落とす『てめえ正気か?』な伐刀絶技、『霸道天星』というものを編み出したのである。もちろんこんな危険極まりない伐刀絶技は、連盟の許可無しに使用する事を禁止する『禁呪指定』を受けている。やつたぜ。

「選抜戦、頑張れよ！」

「あまり乗り気はしませんが」

「くーちゃんからの命令なんだろう?」

「まあ・・・・・・」

「そんじゃ、お姉さんが一肌脱ぎうかね」

「結構です」

「え、即答」

「捕まりたくないでの」

「どゆこと?」

「まあ、特殊な性癖の人には刺さると思いますよ」

「ねえ、何の話してるので?」

明日から始まる選抜戦に向け、そそくさと帰路を歩く。  
寧音が先程からなにか喋っているが無視しておいた。

????  
⊗???. ?? \*  
??? \*

「ねえくーちゃん」

「なんだ」

「あたいがせつかくふー坊の練習相手になるために一肌脱ぎうとしたのにこことわったんだぜ? 酷くね?」

「合法口りはさつさと寝ろ」

「合法口り・・・・・?」

「私は寝る」

「合法口り・・・・・合法口り・・・・・あたい、褒められてる?」

黒乃も無視を貫いた。